

鶯の関跡から伝説の岩橋山(659m)へ

炎暑の続く8月31日、早朝登山で岩橋山を目指した。岩橋山は金剛・葛城山脈中、葛城山と二上山との間にあるピークで、山頂部が大きな不等辺三角形をしていて、大和平野からでもよく目だっている山だ。

日本最古官道の峠道

竹内峠に6時着。ここは日本最古の国道＝竹内街道・横大路の府県境。昔此处にあった関所は「鶯の関」と呼ばれた。ウグイスの名所でもあったのだろう。

今の季節、ウグイスの

声はないが、ツクツクボウシ(蟬)が鳴き競っており、遠くからコジュケイ(キジ科)の声が聞こえてくる。「ちょっとこい、ちょっとこい」(この鳥の聞きなし)。早朝からの闖入者を歓迎してくれているようで、一人歩きの年寄りを励ましてくれる。

ヤブミョウガの花の中、ダイトレを南下

峠にバイクを置いて、6:10 登山開始、関跡地にはシシウドが高く伸びて花を開いており、センニンソウが電柱の支線にまとわりついて花をびっしり、白い斜めの塔を作っている。

杉・桧林の中の林道を上っていく。両側にはヤブミョウガの群落が続き、白い花を並べている。2カ所でクサアジサイが薄紅色の花を開いていた。先週登った葛城山・櫛羅の滝コースではこの花をたくさん見たので、期待していたが、ここでは少なかった。

竹内山を通過

↑ヤブミョウガ

林道から、山道に入り、緩やかな上り坂を歩いて、まもなく竹内山山頂(402.7m)に。登山道から少し西に入った所に三角点石標があり、手製の山名板がかかっていた。

何回かのアップダウンを経たのち、林の中を下って、一旦開けたところに。ここでタマムシ(写真・タマムシ科の昆虫)を拾った。

昆虫の激減に思いを馳せて

拾ったタマムシは6本の脚を動かしてはいるが、もう飛ぶ力はないようだ。ここで生涯を閉じるのだろうか、次世代に命をつなぐことは出来たのだろうか。気候変動、自然破壊や乱獲など人間活動が生態系を乱し、多くの生物種の絶滅、なかでも昆虫の激減が憂慮されている現在、宝石のようなタマムシが子孫を残し続けてほしいと願いながら、路傍の草むらにそっと下した。草むらでもタマムシは光彩を放って美しかった。

玉虫色の役割

タマムシの羽の色は色素ではなく、構造色と呼ばれるもので、薄い多くの層が重なり、その上に羽にある多数の凹凸が光を複雑に拡散させるので、見る角度、光の変化につれて色が変わり、キラキラと虹色に輝くのだ。

法隆寺蔵の国宝・玉虫厨子はこの虫の羽を張り付けて作られており、長い間その美しさと輝きを保っているのはこの構造色だからだ。

鳥ではクジャクやカワセミの羽根、蝶ではカラスアゲハなどの羽の構造色が知られており、いずれも繁殖行動に役立つものとなっているほか、昆虫では天敵の鳥を驚かす仕組みともなっているとのこと。生物進化の妙には脱帽としか言いようがない。

我が家でも鳥よけにCD盤を吊り下げたりするが、これも構造色の活用例だ。

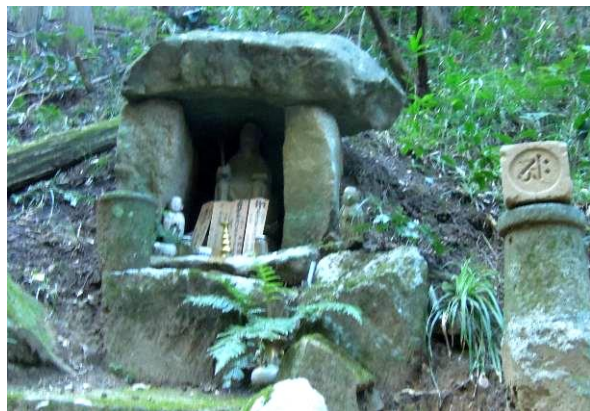
←クサアジサイ

修験道の経塚がある平石峠に

タマムシ→

さて、話を岩橋山目指す山歩きに戻そう。雑木林を通り、再び人工林の林に入る。要所要所に道標とダイヤモンドトレイルの石標が建てられている。





↑ 平石峠にある葛城 28 経塚

高い峠を越えて多くの人々が往来していたとはにわかには信じがたい気がする。

蟬に叱咤激励されながらひたすら登る

休息後 7:30 出発。急傾斜の長い階段が、断続的に続く。ツクツクボウシの声だけは途切れなく続き、その声に背中を押されながら頂上をめざす。

「あそこが山頂だ」と思い込んで登り切った先に、さらに長い階段が続いている。途端に蟬の声が「もういいだろう、年の割にはよくがんばった



カケスの声響く岩橋山山頂

ともすれば、その声に同調しそうになる心を叱咤しながら登って、8:45 岩橋山頂上着。

木々に囲まれた小さな広場に 3 等三角点の石標と二つのベンチがある。蟬の声を圧するようにカケスが啼いている。

昔、修験道の祖・役行者がここから吉野山に橋を架けようとしたとの伝説があり、山頂の東側山中にある段差状の刻みをもつ石造物がその一部とされている。山名はこの伝説によるもの。

9:00 下山開始。往路を引き返し 11:30 竹内峠帰着。ツクツクボウシが「お疲れー、よくがんばったじゃないか」と慰めてくれた。



山歩き余話・マタタビ

鶯の関跡の崖地でマタタビの実を見つけた。多くの実が写真のようなデコボコ状。多分マタタビタマバチと言う昆虫が卵を産み付け、植物の実を変形させたのだろう。いわゆる「虫こぶ」と呼ばれるものの一種で、マタタビタマバチの幼虫はこの中で比較的安全に育つのだ。いいかえると虫の揺りかごなのだ。虫こぶは「忠癭ちゅうえい」とも呼ばれ、実に様々な種類、形態があり、知れば知るほど面白い。

変形したマタタビの実→

この虫こぶはマタタビ酒の原料

この虫こぶとホワイトトリカーなどで造られるマタタビ酒は、健康・滋養の飲み物として、愛用している人も多い。虫こぶが人間によって活用されている一例だが、虫の方は迷惑だろうし、植物にとってはどうだろうか。



“猫にまたたび”はどういう事

日本に“猫にまたたび”ということわざがある。効果抜群と言う意味で使われる。テレビ画面で見ただけだが、マタタビの葉や枝を与えられた猫が、それを噛んだり、舐めたり、頬ずりしたり、挙句の果ては全身にこすりつけて恍惚とした状況、メロメロになるのだ。

しかも大型のネコ属、ライオンなども同様の反応を示すというから、不思議だ。この謎解きには世界の科学者たちが挑んできたが、近年日英の学者が協力してこの植物から分離・発見したのが「ネペタラクトール」という物

↓ 大和高田市からの岩橋山(写真中央のピーク)

質で、蚊を遠ざける特質を持つという。要するに、猫たちは蚊の襲来を避けるのにマタタビが有効なのを知り、それを利用してきたという事だが、果たして、謎解きは完結したのだろうか。

ヘクズの花

